

エントリー名：新潟大学附属新潟中学校

学校名：新潟大学附属新潟中学校

活動名：閉塞感の打破！学校を元気に！～エージェンシーを育む教育課程の編成～

解決すべき課題：昨年度の12月、生徒会役員を決める立会演説会で、ある生徒が「Protect Students」というスローガンを掲げた。この言葉を聞いた瞬間、「生徒による自治」という学校文化を大切にしてきた当校で、この言葉を生徒に言わせてしまったことに職員一同落胆した。一昨年度末より、新型コロナウイルス感染症拡大防止を理由に、生徒の声も聞かずに、一方的に様々な教育活動を制限してきた。「生徒の自治」を中心に教育活動を展開する気概があれば、生徒の協働性や創造力を高めることもできたはずだった。私たち教師は生徒のことを第一に考えて様々な工夫を行ってきた…つもりだった。この「Protect Students」という言葉は、生徒が教育活動に閉塞感を感じていたということ私たちに気づかせてくれた。当校が大切にしてきた教育観である「生徒はよりよく生きようとしている」という視点から、これまでの教育課程の在り方を見直す必要性を強く感じた。変化の激しい予測困難な社会だからこそ、子どもたちが学校の意義・学ぶ意義を実感し、自分の学校を語れる、誇れる、そのような教育を行っていく必要がある。子どもはよりよく生きようとしている。このことにもう一度立ち返りたい。そこに私たち教師の使命があるはずだ。



目標・方針：生徒が自分たちで学校を創り上げている実感をもつことができるように、これまで以上に、教育活動全ての場面で生徒と教師、みんなで創り上げる。そのために、「OECD Education2030 プロジェクト」の考え方を参考に、生徒の「エージェンシー」を育む教育課程を編成する。具体的には、生徒と教師が語り合いながらビジョンを共有し、計画を進め実行しながら常にビジョンと照らし合わせ、修正をしながら、教育課程を創っていく。

※ エージェンシーとは、よりVUCAとなる世界における私たちの目標「ウェルビーイング」の実現に向けて、「変革を起こすために目標を設定し、振り返りながら責任ある行動をとる能力」とされており、生徒が自分の人生や周りの世界に対してポジティブな影響を与えうる能力と意思をもっているという原則にもとづいている。

活動内容：① 「附中の明日を語る会(=あすかた)」の設定

生徒と教師が教育活動のビジョンを共有する「あすかた」を教育課程に位置付けた。具体的には、職員会議で各種行事などの実施計画が示される前に、教員間でビジョンを共有する「語る会」を設け、その後、生徒と「あすかた」を行い、教師と生徒が創り上げたビジョンを反映した実施計画を作成し、職員会議で決議できるようにした。この実施計画の中で、再度生徒とビジョンを共有する「あすかた」を位置付けたりしながら、年度途中でも、生徒のニーズなどに応じて柔軟にカリキュラムをデザインできるようにした。



② 語る会で生徒と共有したビジョンを基に、実際に教育活動を生徒と創り上げる

教師と生徒が協働して教育活動の目標設定を行う。このプロセスを経験するからこそ、生徒はその後の活動に責任をもって取り組み、エージェンシーが発揮されていくと考えた。

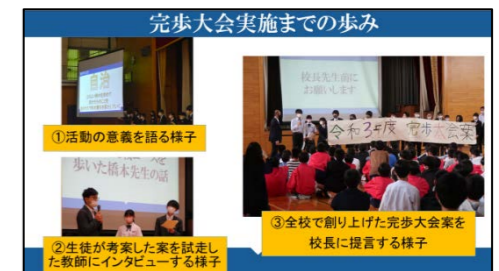
取組の過程：教師のマインドの変革～教師の構えを変える怖さ～

「生徒の声を聞こう。」「生徒と一緒に。」言葉では簡単。だが、どこまで認めるのか、答えるのか、一緒に作る？どうやって？教えたらだめなのか？この教師の構えを変える怖さ乗り越えていくことが一番困難だった。いや、今も難しい。乗り越えられていない部分もあるかもしれない。なぜなら、「〇〇をしたい」、そういった生徒の声に無意識に身構えてしまうところが私たち教師にはある。生徒のエージェンシーを育もうとして、生徒の声に耳を傾ける。その結果、生徒が何かを変えようとしてくるのではないのか。認めてしまったら、何でも言うてくるのではないのか？教師の役割は？自分は必要なくなるのではないのか？何より彼らの思いを叶えてあげられなかった

ら…と考えてしまう。この怖さとどのように向き合っていたか。「あすかた」をきっかけとして、生徒と教師で再開実現に至った「すなやま完歩大会」を紹介する。

完歩大会は20～40kmの砂浜を歩き、体力の限界に挑戦し、自己の成長を確かめることができる当校の伝統行事である。昨年度は、新型コロナウイルス感染症拡大の影響で実施することができなかった。今年度も年度当初は開催することは難しいと考えられ、年間行事計画には入れていなかった。そんな中、完歩大会を経験したことがある生徒は、3月の「あすかた」で、「経験していない後輩たちになんとか経験させてあげたい」、経験していない生徒は「来年度実施しないと経験者がいなくなるため伝統が途絶えてしまう」などの声を私たちに届けてくれた。

私たちは壁にぶつかった。「生徒が行いたいと言っているから行うのか？」「年間行事計画はもうすでに出来上がっているぞ？」「何でもできる！生徒はそう捉えるのではないか？」、そんな声が拳がったり、吐露し合った。さらに生徒にも「先生も行きたい！でも難しさがある」「不安な気持ちもある」と正直に自分たちの思いをぶつけた。生徒と語れば語るほど、不安はなくなっていく。「挑戦したい！」という熱い思い、「みんなでよりよくなりたいたい！」というウェルビーイングを目指す思い。そんな思いばかりだった。私たちは無自覚にもっていたマインドを変革し、生徒の思いを支えようと決意した。



その後、校長が大学と連携し、安心安全な開催に向けた条件を整理した。そして、4月最初の全校集会で「あすかた」の声を全校に紹介し、クリアしなければいけない条件があること、その条件をクリアできるかどうか生徒と教師で共に考える開催検討委員を募集することを提案した。検討委員会では、開催を前提とするのではない、全校で行事の価値を共有しようなどといった声が生徒からあがり、全校生徒の考えや不安を共有しながら、条件をクリアできるように、例年とコースや距離を変え、開催案を生徒と教師で創り上げた。そして、検討委員は完歩大会案を校長に提言し、校長が実施の判断をした。開催が決まった後も、検討委員は開催に消極的な生徒の思いを最後まで大切にしながら、実施に向けた準備を進め、実施に向かった。

こうした実践を重ねることで、生徒の声に「答える(成否を判断する)」のではなく、「応える(寄り添って共に考える)」ことが大切であると分かった。「自分の思いを聞いてくれた」、「先生の思いも聞けた」、「一緒にどうしていけるかを考えられた」こんな思いを生徒はもってくれた。「できる」、「できない」ではなかった。私たちが「応える」度に、生徒は学級・学年・全校をよりよくしようと行動していった。その姿は本当に素敵だった。ビジョンが共有できているからこそ、今まで以上に生徒のよさを見とれるようになり、サポートできた。「生徒とのコミュニケーションを止めない。」「一緒にやってみよう！」そんな言葉が私たちの合言葉となって、少しずつ私たちの構えが変わってきたと感じている。教師の構えが生徒のもっている「よりよくありたい」を引き出せるのだ。

活動の成果：今年度、エージェンシーを育む視点から教育課程を編成していくことで、生徒とビジョンが共有され、生徒が責任をもち、主体的によりよくしていこうと活動を考えたり、実行したりしていく姿が今まで以上にみられるようになった(タブレット端末使用の心構えである「附中GIGA宣言」の作成、男子更衣室の設置など生徒が自ら発案し、教師とともに協働して実現した)。そして、「Protect Students」を掲げた生徒は、学期末に全校の前でこう語った。

「僕が一番感じているのは活動が活発になったということです。いろいろな活動をして、完歩大会とか男子更衣室とか生徒が中心となって物事を進めているところがすごいなって感じています。その根幹にあるのが主体性だと思っています。この附中を創っていく上で、自治とか自由につながる主体性が育まれてきたと感じます。」

この姿は自分の学校を語れる姿。自分たちで学校を創ってきている実感、さらによりよくしていきたい思いがあるからこそ、語れる姿である。生徒の中で確実にエージェンシーが育まれていることを実感している。そして、生徒が輝き、教師のワクワクがあふれる学校になってきた。